

## 手賀沼のプランクトン 2014年—2018年

梶眞壽<sup>1)</sup>・八鍬雅子<sup>1)</sup>・林紀男<sup>2)</sup>

1)美しい手賀沼を愛する市民の連合会, 2)千葉県立中央博物館

かつて富栄養化が著しかった手賀沼は、各種対策に加え北千葉導水の効果によって最悪の状態を脱した。その後の水環境の変化によって、プランクトンの種類がどう変化するか検証してきた。2011年から2013年までのプランクトンの季節的変動を手賀沼学会に報告してきた。今回これに引き続いて、2014年から2018年の結果をまとめた。

採取場所は、手賀沼北岸、手賀大橋北詰の親水広場脇。

毎月前・後半の二回、桟橋上からプランクトンネットを投入して表層水を約10m曳いた。

採取ビンからスポットで一滴取って検鏡・同定し、季節による種別の出現頻度を比較した。

植物プランクトン：「藍藻類」ミクロスティキス類は常に存在するが、アオコを作るほどの密度にはならない。ユレモ類は密度は低いが頻度は高い。ネンジュモその他の種は出現が少ない。「緑藻類」クンショウモは個体サイズ、出現頻度共に優勢。常連だが夏に多い。他の種は多種いるが、出現頻度・個体数は少ない。「珪藻類」ヒメマルケイソウの仲間は種類が多いが、それぞれの種で大発生することがある。コバンケイソウ、ハリケイソウは個体は大きいが、密度は低い。

動物プランクトン：「原生動物」種は多いが、個々の密度は少ない。「ワムシ」それぞれの種で大発生することがあるが、一過性らしく翌日は少なくなる。ツボワムシ、ツノワムシ、ドロワムシ、フクロワムシ、ハネウデワムシが高頻度に認められた。個体が大きいのでプランクトン全体に占める容積比率が大きい。「ミジンコ」ケンミジンコ類のノウプリウス幼生はよく見かけるが、成体の出現頻度は低い。

総括：2014年から2018年の5年間の傾向として、1) プランクトン密度は下がっている。2) 秋に珪藻が寡占する状況が認められなくなった。3) ミジンコ類の減少が著しい。4) 北千葉導水による流速の変化がプランクトン相に影響している可能性がある。などの点を総括できた。

※梶眞壽・八鍬雅子・林紀男. 2019. 手賀沼のプランクトン 2014年—2018年. 千葉生物誌. 69(1): 27-28. より引用転載